

旅立ちの湯

緑濃き高速道を突き抜けてやがて至りぬ温泉街へ

あちこちの「湯」という文字の眩しさよどこへ行っても高き青空

日常と非日常とを分かちたるのれんぐぐりぬ頭を垂れて

脱衣所に服を畳みて置いていく間も回っている扇風機

ふるさとを離れて裸身となる時間 この世をわずかに浮遊していく

蜘蛛の巣を張らせぬように触れられぬころの表と裏を洗いぬ

汗を流し肩書を流し呼び戻す妻にも母にもあらぬわたくし

はからずも月の背後を知るように並びし人の背中を見やる

てのひらに湯を掬いては湯をこぼすひととき無心を取り戻したり

湯の跳ねる音のほかなくここからは見えない月の明るさ思う

だれもかれもまなざし遠くゆらめいて火の芯をその裡に秘めおり

一杯のみず飲みほせばひとすじの管となりゆく身体のあわれ

入れ替わり立ち替わりしても人間はひとりにひとつずつの魂

昨日、今日、明日もだれかを受け入れて湯は海よりも熱く波打つ

離れてはなおも遠くを恋う人は生まれながらの旅人である